池ノ上 真一 -Shinichi IKENOUE- （北海商科大学　一般社団法人日本海洋文化総合研究所）

Part.1
価値の
再発見
01

グローカルの
シンボル・灯台

キーワード　グローカル,灯台ナラティブ,ポスト領域社会,ポストポストモダニズム

はじめに

灯台を学術的に捉えるアプローチは限られており，その多くが建築学の観点からなされてきた．近代灯台の研究として，藤岡洋保氏は「灯台の父」と称されるリチャード・ヘンリー・ブラントンをはじめとした灯台技術者に焦点を当て，谷川竜一氏は東アジアの近代建築史の中で，灯台を近代化と地域の関係性から位置づけている．両者の共通点は，近代灯台を建築遺産として捉える視点である．建築史において，近代から現代にかけての発展は，西洋建築の導入と日本の伝統的様式の融合を経て，現在の在来工法へと進展してきた．西洋建築は富国強兵政策のもと積極的に導入されたが，日本の気候や生活様式に適応し，独自の発展を遂げた．現代の日本の住宅が洋室と和室を併せ持つように，建築史は単純な移植ではなく，地域特性との融合による発展の過程である．

この流れを灯台に当てはめると，近代灯台の導入がどのようなプロセスを経たのかが重要な問いとなる．藤岡氏や谷川氏の研究が示すのは，灯台が単なる西洋建築の移植ではなく，技術や材料が地域特性と結びつき，独自の形へ変化していった点である．近代灯台は，当初は西洋技術を忠実に取り入れたが，次第に日本の環境に適応し，独自の建築様式を確立した．さらに，近年では観光資源や文化遺産としての再評価が進み，灯台の新たな価値が模索されている．

このように，近代灯台の導入プロセスを紐解くことは，建築史の探究にとどまらず，現代における灯台の役割や将来の展望を考える上でも重要である．灯台は単なる航路標識から，地域文化の象徴や観光資源としての価値を持つ存在へと変化しつつある．この変化を理解するためにも，近代灯台の歴史的意義を丁寧に分析し，その価値を明確にすることが求められる．

日本の灯台ナラティブ

①世界とのつながり

現在見ることができる灯台は，多様な形状や機能，立地，建材を持つが，それには歴史的背景がある．石丸（2025）の「日本の灯台の価値を可視化する建造物編」によると，灯台の発展は時間軸に沿って分類される．

「西洋灯台導入期（1869〜1876年）」では，日本の開国後，ヨーロッパの技術が導入され，お雇い外国人の指導のもと九州北部・瀬戸内海・関東を中心に灯台が建設された．木造・煉瓦造・石造・鉄造・混構造の5種類が用いられた．

「日本主導整備期（1877〜1923年）」では，日本人技術者が灯台建設を担い，日本海側や北海道へ建設が進むとともに，耐火性・施工性に優れたコンクリートの採用が始まった．

「防災型創出期（1924〜1945年）」では，関東大震災や戦争により多くの灯台が倒壊し，再建時にはほぼコンクリート造が採用されたが，塩害対策や施工上の課題が多かった．

「防災型の普及期（1946年〜）」では，戦後の再整備により新設・建て替えとともにコンクリート造が標準化され，構造的多様性は減少したが，近年ではデザイン灯台の導入など新たな展開も見られる．

この時間軸を基に，灯台の建材と構造の発展が明らかになる．また，星野（2025）の「日本の灯台の灯器（光源）の変遷」によると，灯台独自の技術や建築意匠も分類可能である．しかし，これらの分類だけでは説明しきれない要素もあり，次に日本の海洋文化との関係性について考察する（図1）．

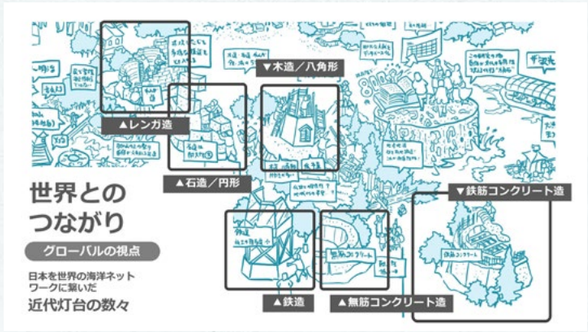

図1.林匡宏 世界とのつながり 2024 イラスト

②日本とのつながり

古代から近世にかけて灯台的な役割を果たした構造物を分析することで，近代灯台の形成に日本の海洋文化が及ぼした影響を推測できる．石村（2025）の「海から見た牛窓の景観－古墳・寺院・燈籠堂－や高野（2025）の「北前船の航海を支えたランドマーク 〜常夜灯・日和山・灯台〜」では，日本列島における海洋文化の発展が示されている．日本では旧石器時代から交流・交易や漁労が発展し，航行の目印として燈籠堂や常夜灯が各地に築かれた．これらの文化的背景は近代灯台の設置にも影響を与えたと考えられる．

「灯台の父」ブラントンは，D.&T. スティブンソンの仕様書をそのまま使わず，日本の環境特性に適応させて建設したことが阿瀬・藤岡（2003）の研究で明らかにされている．これは西洋技術を導入しながらも，日本の風土や文化を取り入れた独自の灯台建築の形成を示唆する．また，灯台建設は国の政策だけでなく，地域のニーズに応じ自主的に進められた例も多い．藤岡（2021）によると，北海道では冬季の航行が困難なため，国の整備を待たず1888年から1893年にかけて道庁が負担し20基の灯台を建設した．明治時代には出雲日御碕灯台など，各地から帝国議会へ灯台設置の請願が提出され，灯台が地域社会にとって不可欠なインフラと認識されていた．

建材や工法の選択にも地域特性が反映されている．石丸の研究によれば，フランス技師フロラン監修の灯台はフランス積みや平積み，ブラントンや日本人技師が建設した灯台はイギリス積みが採用された．また，犬吠埼灯台や御前埼灯台には西洋には見られない二重殻構造が導入され，耐震性向上が図られた．これらの点から，近代灯台は西洋技術の導入にとどまらず，日本の気候や歴史に適応し発展したことが明らかである．和洋折衷の建造物として各地に建設され，世界の技術と地域の知識・文化が融合した，日本独自の海洋文化の結晶といえる（図2）．

図2.林匡宏 日本とのつながり 2024 イラスト

③地域とのつながり

地域で培われた要素は，どのような経緯で生まれたのか．本稿では，灯台の立地環境に着目し，地質や地域の生態系，人々の暮らし，コミュニティの形成との関連を考察する．詳細は栗原（2025）の「灯

台の足下から見える地球の記憶と地域の歴史との関係性」や海津氏の「灯台と地域学」に詳しい．灯台建設に影響を与えた要素として，日本が地震大国であり，多様な地質を有する点が指摘される．例えば，漁業は日本の地形的特徴と密接に関連し，急勾配の河川を通じて陸域のミネラルが海に供給され，豊かな藻場を形成した．これにより，魅力的な漁場が生まれ，地域の生態系と暮らしのあり方が地形・地質によって規定されてきた．また，この豊かな漁場で得た海の恵みは，地域文化を醸成し，陸域や他地域との交流・交易を促し，文化の多様性を育んできた．

灯台の立地も，こうした地形的要因と密接に結びついている．例えば，千葉県銚子では，近世から観光地として発展し，犬吠埼灯台の建設後は「磯めぐり」が盛んになった．地域の自然環境が観光と結びつくことで，灯台は航路標識にとどまらず，地域のランドマークとしての機能を担っている．

以上のような背景を踏まえると，灯台は単なる西洋建築の移入ではなく，地域特性を取り入れた和洋折衷，さらには地洋融合の建造物といえる．ローカルを深く探ることで，地球規模の特性に行き着くのである（図3）．

図3.林匡宏 地域とのつながり 2024 イラスト

グローカル時代における灯台の価値再考

①ポスト領域社会への移行

現代社会は，「Post-Territorial Society（ポスト領域社会）」へ移行しつつある．IT 技術の発展により物理的な土地の制約が軽減され，宇宙空間を含む新たな空間が都市の延長として機能し始めている．ジョン・アーリ（2022）は，物理的移動のみならず精神的移動を含めた「移動」の概念を強調し，社会科学の発展の重要性を指摘している．

都市計画論では，産業革命により都市構造が変革し，機能主義が導入されたことで，工場や住居の密集による公害問題が発生した．これに対処するため，公衆衛生の概念が確立され，さらに蒸気機関車の普及により「footloose urbanism」が進展し，ガーデンシティ論やニュータウン建設が展開された．近年では航空・宇宙技術の発展により，移動手段と空間利用の拡張が進み，さらなる「フットルース化」が進行している．そして現代の都市計画は，成長拡大型からコンパクトシティ論やタクティカル・アーバニズムといった新たな戦略的アプローチへ移行しつつある．ポストモダニズムを経て，グローバル化の進展とともに地域社会の再構築が求められ，「グローカル」の重要性がますます高まっている．ポストポストモダニズムと呼ばれる新たな都市・社会構造が問われる時代に突入したといえる．

②灯台のナラティブが示す未来

灯台の意義について，藤岡（2021）は，灯台は単なる構造物ではなく，列強の影響や地域の自立的発展の意志が反映されたものと指摘する．また，西洋技術の導入過程を理解する上でも重要であり，資材調達や立地，技術者の工夫など多くの要素が関わっている．GPS の普及で航路標識としての役割は薄れつつあるが，文化資産としての価値が高まり，保存と地域振興への活用が求められている．

本稿の視点から言い換えると，灯台は地域や人々がポストポストモダニズムを考える上で基軸となるナラティブを蓄積したメモリー装置である．そして，これからの社会を展望するための指針を示す存在ともなり得る．灯台には，航路標識としての機能にとどまらず，ランドマーク，教育，観光，防災など多様な価値が見出せる．今後の人と海の関係を持続可能なものとするためにも，灯台のナラティブに着目し，未来の地域や社会のあり方を探究することが重要である．